

ロシア兵墓地につながる赤十字の心

1904年から1905年に行われた日露戦争のとき「マツヤマ」「マツヤマ」と叫んで投降（自らの意志で武器を捨て、敵軍に降参するロシア軍兵士がいた。

ロシア兵は、どうして「マツヤマ」と叫んで投降したのであろうか。

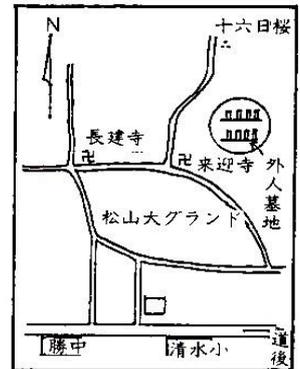
日本は、日露戦争が始まる18年前の1886年に、捕虜（投降した兵士）を人道的に扱うというジュネーブ条約（赤十字条約）に加入した。そして、世界の人たちは、日本がこの国際的な決まりをきちんと守るか注目していた。

愛媛県松山市は、1904年3月、日本で最初のロシア兵の捕虜収容所となり、1906年2月までの間に、のべ6,019人のロシア兵が捕虜としての生活を送った。そして松山の捕虜収容所を管理する人たち、日本赤十字社の医師や看護婦（看護師）たち、一般市民の人たちみんなが、捕虜に対して、やさしく、親切に接した。

例えば、捕虜が松山に最初にやってくる玄関口の高浜港には「祖国ロシアのために勇敢に戦ったみなさん、我々は心あたたかく迎えます」とロシア文字の大きな看板を掲げた。

また、捕虜のうち将校（兵士を指揮する上級の兵士）はかなり広い範囲での自由外出が許された上、中には借家住まいが許されたものもいた。さらに、捕虜たちは、小学校の運動会や中学校のボートレースに招かれたり、大相撲や芝居の見物まで楽しむことができた。このように捕虜を人道的に扱う以上に手厚くもてなしたようすが、外国の記者たちにより伝えられ、それがロシアの新聞にのり、さらに日露戦争で戦っているロシア兵士に伝ったのであろう。どうせ捕虜になるのであれば「マツヤマ」に行きたいということになったのである。

ところで、松山に収容された捕虜は戦争で深い傷を負ったものが多く、日本赤十字社の医師や看護婦の手厚い看護のいかにもなく死亡する兵士が次々とでてきた。遠い異国で命を落とす無念さは図り知れないものがあつた。1904年5月16日、ロシア上等兵ゲルシイ・スタフスキーが死亡する。本人はユダヤ教徒であったが松山にはユダヤ教の司祭がいないので同じユダヤ教の捕虜がその代わりに祈り、



ていちょう そうぎ
丁重な葬儀をしてロシア兵墓地に埋葬した。このあと死者が出るたびにその国籍
しゅっしんしゅうは
や出身宗派に応じてていねいに葬儀・埋葬を行った。



ロ シ ア 人 墓 地

特に、1905年9月に亡くなった戦艦の艦長であったワリシー・ボイスマン大佐の葬儀には、日露合わせて800人も参会した。

結局、98名の捕虜が松山のロシア兵墓地に埋葬され、手厚く管理されることになった。

ところが、昭和に入ってから、日本は軍人の力が強くなり、次第に戦争への道を歩んでいった。

「生きて虜囚のはずかしめを受けず」のように、捕虜になって恥ずかしい思いをするぐらいなら死んだ方がよいといった考え方が教えこまれるようになっていった。

そのようなことから、捕虜に対する考え方が冷たくなり、ロシア兵墓地を世話する人がいなくなり荒れ果てていった。

第二次世界大戦が終わってから15年たった1960年、ロシア兵墓地は周辺の土砂崩れのため、現在の御幸1丁目の来迎寺の境内に移転することとなった。そして、それを機会に地元の人たちや松山商工会議所の婦人会による管理と清掃奉仕が始まった。

特に、ロシア兵墓地が校区内にある勝山中学校では、1966年ころより、年に数回、墓地の清掃を始めた。1983年からは、生徒会が毎月日を決めて清掃活動をするようになった。この清掃活動の目的は、「日露戦争で捕虜となったロシア兵を親身しんみになって世話をした松山市民の伝統を受け継つぎ、勝中生の心を一つつに結びつける活動にしたい、そして、この取り組みを今後も受け継つぎ発展させたい」というものであった。すなわち、約100年前の日露戦争のときの松山市民の博愛・人道はくあい じんどうの精神、いいかえれば、赤十字の心を引き継つぎ継承けいしょうしようとするものであった。

現在は、毎月第二土曜日、午前9時、生徒会の呼びかけで自主的に集まった生徒たちが清掃活動を行い、最後に、参加者全員が墓地の前に立って、異国に眠る兵士に心をこめて黙もくとう禱とうをしている。

お世話になった方

松山市立勝山中学校長 近藤 純 一

参考にさせていただいた本

「松山収容所」(中央公論社刊)

才神時雄 著

「マツヤマの記憶」日露戦争100年とロシア兵捕虜

松山大学 編